

# 専門高校の現場から

～進学指導と生徒の動向～

## 第1回 商業高校

近年、専門高校から大学への進学率が上昇している。その背景には、社会情勢の変化や大学のユニバーサル化などが挙げられるだろう。本号から、専門高校に通う高校生の進路観や高校での進路指導、キャリア教育への取り組みなどを紹介する。本号と次号では商業高校を取り上げる。

### 商業高校の概況

#### キャリア志向が強く 卒業生の過半数が進学

2013年3月現在、全国で約21万人の生徒が商業高校に在籍している。以前は、卒業後に就職する生徒が大半を占めていたが、ここ10年あまりは卒業生の50%以上が進学している。

全国商業高等学校協会(全商協会)の菅原則事務局長は、この背景にあるのは「社会の高度化だ」と言う。大学に進学し、高度な知識を得て、自分が納得できる就職がしたいという強いキャリア志向の表れだろうと分析する。

2012年度の進学者は商業高校全体で約56%。内訳は大学が約35%、短大が約12%、専門学校が約50%だった。約半数が専門学校に進学しているが、「最近では、他分野を学ぶ学生と交流し知見を広げたいと、大学進学をめざす生徒が増えている」(菅原事務局長)とのことだ。

大学の商学部や経営学部などでは、センター試験の数学が簿記や情報処理に代替可能となり、商業高校からの受験の道が広がっている。

全商協会では独自に、同志社大学、明治大学、中央大学など、約20大学の推薦枠を持っている。推薦を受けるには、各都道府県の校長会および全商協会の2段階の選考を通過する必要がある。成績が優秀で

あることはもちろん、意欲的に学ぶ姿勢も問われる。各大学からの報告によると、この推薦制度で入学した学生は、いずれもGPAのスコアが高いという。その他、各大学から届く課題は、進路・学習指導に生かせるよう、全国商業高等学校長協会などを通じて全国の商業高校に報告している。

大学がこの推薦枠を設けるには、一定の志願者数があり、全商協会の大学入試対策委員会での審査を通過することが条件だ。

#### 英語力の強化は 進学、就職の両方に有効

商業高校では、さまざまな資格取得をめざしている。その過程で得られる専門知識や技術・技能の向上は、学びに対するモチベーションの維持、さらには大学進学後の学習意欲にもつながっているようだ。簿記や情報処理などの資格を生かして、一般公募の推薦入試やAO入試に臨む生徒も増加。

最近では、英語の学習指導に注力する高校も増えている。これは、企業のグローバル化に対応できる語学力の育成に加え、大学での学びに対応できるよう普通科との学習量の差をなくすことが目的だ。

全商協会では、主に英語でのコミュニケーション力を問う、検定試験やスピーチコンテストを実施。検定に合格し、国際関連の学科への学校推薦を獲得する生徒もいる。

### 事例

#### 岐阜県立岐阜商業高校

設立：1904年
区分：公立学校
生徒数：1118人(2013年3月時点)
設置学科：流通ビジネス科/会計システム科/情報処理科/国際コミュニケーション科
大学合格実績：国公立28人、私立230人(2012年度現役合格者・短大含む)

#### 資格の取得で 向学心がさらに高まる

2002年度以降、毎年約7割の生徒が進学している岐阜県立岐阜商業高校。進学者数が就職者数を上回ったのは1995年頃で、商業高校全体の平均と比べると5年ほど早い。

部活動が盛んで、インターハイをはじめとする各種大会で好成績を挙げている。硬式野球部は2012年の全国高校野球選手権大会に出場。卒業生の中にはプロスポーツ選手も多く、シドニーオリンピック女子マラソンの金メダリスト・高橋尚子も卒業生だ。以前は、部活動の実績を評価され、スポーツ推薦による進学者が多かったというが、近年は、一般公募推薦で多数の合格者を出している。

「特に進学を勧めるようなことはしていない。毎年進学率が高いので、本校に入学する以前から、大学進学もできる高校だと理解しているのではないかと」と進路指導部長の大野信雄教諭は話す。入学時に行うアンケートでは、約70%の生徒が進学を希望する。



入学直後から記入し続ける「Career Chart」(左)は、自分が将来、どうありたいかを考えるきっかけを与えている。先輩の体験記や3年間の歩みが掲載されている「進路のてびき」も進路決定に役立っている(上)。

各学科の専門分野に合わせ、日商簿記検定1級や実用英語検定2級といった資格をクラス全員が取得することを目標にしている。同校では、「資格を取得していくうちに、もっとこの分野を極めたい、もっと高度な勉強をしたいという向上心が芽生え、進学をめざす生徒が多いように思う。専門学校ではなく、大学への進学者が多いのも、このあたりに理由があるのではないかと」という分析もされている。

2012年度は、進学者の約71%が富山大学や静岡大学などの国立大学を含む4年制大学に進んだ。これは、商業高校平均の約35%を大きく上回っている。

#### 早期のキャリア教育が しっかりした動機付けに

3年間を通じて常に目標を設定し、将来をより具体的・計画的に考えさせるために「Career Chart」を活用している。これは、立命館大学の「Career Chart」をアレンジした、自分の進路を考えるためのツールである。その時々自分の見直し、進路について自問自答しながら学期ごとに記入する。就職するなら希望する業種や職種を、進学するなら学びたい分野(学部や学科)を言えるように調べさせ、そのためには何をすべきか、目標や課題を明確にさせるのが目的だ。

同時に、2年生の後期では具体的な

企業や大学を想定して志望理由書を作成する。そこには保護者の署名・捺印欄を設け、親子で意思疎通を図るよう促す。三者懇談では進路希望の確認などに活用している。

これらの作業が、「行ける大学」ではなく「行きたい大学、学びたい学問」、「入れる企業」ではなく「働きたい企業・職種」へと意識を変えさせる。毎年1月には、卒業を控えた3年生が自分と同じ学科の1、2年生に対し、就職・進学先などの進路、勉強と部活動との両立などについて話す「進路縦割LHR(3年生と語る会)」を開催。「私たち教員に言われるより、等身大の体験談は何よりの刺激になるようだ」(大野教諭)。

先輩たちの体験談に感化され、自分の進路にきちんと向き合うようになる生徒が多いという。

#### 手厚い普通教科の補習で 一般入試挑戦者が増加

放課後の進学補習や、普通教科の教員によるマンツーマン指導により、普通教科の学習時間不足を補っている。

他にも推薦入試やAO入試で早期に進路が決定した生徒には、自由登校期間の12月から2月まで、進路指導部を中心に「学力向上プロジェクト」と銘打った英語と数学の補習を実施している。卒業生の「大学進学後に英語や数学の学力不足を感じた」という声をふまえて、6年前にスタート、学力の定着を促す。卒業式直前まで通う熱心な生徒が多い。

資格や部活動の実績を生かした推薦・AO入試による進学が主流だが、高校の学習支援によってセンター試験や一般入試に挑戦する生徒も増加。2013年3月時点では12人になった。また、現役で2人が国立大学に一般入試で合格している。

「専門高校から推薦で入学させることに対して、学力不足を懸念し、消極的な大学がある。学力だけで評価するのではなく、学びたいという意欲や高校での努力の成果を評価するような選抜方法も重視していただきたい。そうすれば、専門高校でがんばった生徒が大学で活躍できる機会も広がる」と大野教諭は語った。

#### 生徒の声

犬飼あかねさん 会計システム科3年

#### 先輩の体験談に刺激を受け進学を決意

小学生のころからバドミントンクラブに入っていたので、バドミントン部の強い県岐商は、あこがれだった。進学や就職を視野に入れてというより、強豪チームで活動したいというのが進学理由だ。そのため、入学直後は「行ける大学があればいいな」と思う程度だった。自立心が強いので、修得した簿記

の知識を生かして就職しようかと思うこともあった。そんなとき先輩方の体験記を熟読。ある先輩が進学した大学に興味を覚え調べたところ、「私が学びたいのはこの分野。ここで学びたい」と、やりたいことがわかり、進学を決めた。部活動と両立し志望校合格に向け、好きな英語が武器になるよう勉強している。

※所属・役職は2013年3月末現在のものです。